

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (特設分野研究)

研究期間：2014～2017

課題番号：26310110

研究課題名(和文)学際アプローチによる高齢者のセクシュアリティと心身の健康・社会経済状態の実証研究

研究課題名(英文) Empirical Verification, Based on an Interdisciplinary Approach, of the Sexuality and Mental and Physical Health and Socioeconomic Status of the Elderly

研究代表者

今井 博久 (Imai, Hirohisa)

東京大学・大学院医学系研究科(医学部)・特任教授

研究者番号：20316631

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,400,000円

研究成果の概要(和文)：わが国で初めて高齢者の性について全国規模で調査を実施し600人以上から回答を得た。性のみならず人間的なつながり、関係性の満足度(性の概念の捉え方、性交の有無、配偶者間の愛情度など)を質問した。同時にエド・ディーナーの人生満足度の尺度を用いて測定した。「性生活は重要である」では、年齢が上がるにつれて人生満足度が高くなるのに対し「重要でない」では、75歳以上で人生満足度が低くなっていた。「性生活についての望ましい関係」については、「性的な関係そのものを望まない」では人生満足度は低く、「精神的な愛情やいたわりのみ」で人生満足度が高かった。超高齢社会の「性」を軸とした人間関係で重要な示唆を得た。

研究成果の概要(英文)：We conducted the first nationwide questionnaire survey of sexuality in the elderly, and received more than 600 responses. Respondents were asked not only about their sexual relationships but also about their emotional relationships and their level of satisfaction with their relationships. Ed Diener's satisfaction with life scale (SWLS) was also used. The level of satisfaction increased with age among respondents saying that "sexual activity is important," but was lower in respondents with age & over 75 years who said that "sexual activity is not important." The level of satisfaction with one's "desired sexual relationship" was low among respondents saying they "do not desire a sexual relationship per se" and high among respondents saying they desire "only psychological affection/kindness." These results represent important findings for sexuality and human relationships in a super-aging society.

研究分野：疫学

キーワード：高齢者 セクシュアリティ 幸福感 社会経済 健康関連QOL

1. 研究開始当初の背景

わが国は超高齢社会を迎え 65 歳以上の高齢者が急増している。高齢社会対策基本法第 6 条に基づき高齢社会対策の大綱が閣議決定され、その冒頭の「基本的な考え方」では「高齢者の捉え方」の意識改革の必要性が述べられている。高齢者の生活実態の捉え方についての意識改革をはじめ、高齢者の人間関係、働き方や社会参加の在り方等を根本的に転換させなければならない。たとえば、「高齢者は無性 (asexual: 他者に対して恒常的に恋愛感情や性的欲求を抱かないこと) である」と誤った先入観があり、「人生 65 年時代」ではなく「人生 90 年時代」を前提とした仕組みに転換することが期待されている。

(1) 「高齢者」の捉え方の意識改革

『(中略) 団塊の世代が 2012 年から 65 歳となり、2012 年から 2014 年に 65 歳以上の者の人口が毎年 100 万人ずつ増加するなど高齢者層の大きな比重を占めることになる。このため、これまでに作られてきた「高齢者」像に一層の変化が見込まれることから、**意識改革の重要性**は増している。

「高齢者」の捉え方の意識改革

旧来の「**高齢者**」像に一層の**変化**が見込まれることから、**意識改革の重要性**は増している

EX. 高齢者は無性 (asexual) である
誤った先入観の払拭 正確に「高齢者像」を捉える無性 (asexual) とは:
他者に対して恒常的に恋愛感情や性的欲求を抱かないこと

2. 研究の目的

わが国は世界のどの国も経験したことのない超高齢社会を迎え、そこにおける人と人の関係は、従来の固定した考え方で捉えることを困難にしている。とりわけ、高齢の夫婦間および異性間の「セクシュアリティ」の在り方は、旧来の規範や観念と現実との間で大きく揺れ動き、高齢者のみならずそれ以外の世代をも困惑させる状況に至っている。高齢者のセクシュアリティは喫緊の課題である。

そこで、本研究の目的は新しい視点から多様で個性的な高齢者のセクシュアリティの生態像を定量的に分析し、超高齢社会における望ましいウェルビーイングの在り方を検討することとした。

セクシュアリティ

本研究で使用する「セクシュアリティ」では、狭義のセクシュアリティで示される人間の身体の一部としての性器や性行動を示すのではなく、以下のように定義する。

「異性との性的関係のみならず人間的なつながりや愛情、友情、融和感、思いやり、包容力など、およそ人間関係における社会的・心理的側面や、その背景にある生活環境などもすべて含まれる」

(『現代性教育研究』1983 年刊の定義から引用し本研究用に再定義)

ウェルビーイング

元々は**個人の権利や自己実現が保証され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念である**。1946 年の WHO 憲章草案において、「健康」を定義する記述の中で「良好な状態 (Well-being) として用いられた。最低限度の生活保障のサービスだけでなく、人間的に豊かな生活の実現を支援し、人権を保障するための多様なソーシャルサービスで達成される。(中谷の定義を引用)

< 国内・国外の研究動向及び位置づけ >

日本では 40 年近く前に『老人と性』(1975 年刊) が出された。1979 年には高齢者の性を QOL の観点から本格的に分析した『老年期の性』が大工原秀子により刊行され、「生活の質」を取り入れている視点は画期的であった。2000 年には日本性科学会の荒木らが中高年 (80 歳未満) の男女 1020 人を対象にした学術調査の成果を報告し、そこでは高齢の夫婦間のより良い性生活のあり方に言及した。

しかし、こうした既存研究は狭義の性行動にのみ焦点を当ており、本研究が目指してい

る成果とはまったく異なる。また対象者数が少ない、あるいは病院来訪者を対象にするなどしており、研究としてはバイアスが大きい。ため得られた知見には正確性や代表性が担保されていない。残念ながら、わが国では欧米の既存研究と比較して学術的あるいは精度の高い調査研究はほとんど実施されていない。

欧米の研究動向を俯瞰すると、精度が高い研究論文が多く出されている。近年の優れた代表的な論文では、米国の Lindau ST らの A Study of Sexuality and Health among Older Adults in the United States (N Engl J Med 2007; 357:762-774)があり、この論文では性行動と健康状態や疾病との関係を分析し、結論では「(米国の)多くの高齢者は、性的に活発である。(中略)性的な問題は高齢者の中で頻繁にあるが、これらの問題はまれにしか医師と議論されない」としている。また Taylor A らは Sexuality in Older Age: Essential Considerations for Healthcare Professionals (Age Ageing. 2011;40(5):538-43) で英国の実態を分析し、「高齢者は無性 (asexual) という考え方に反論するエビデンスを示し(中略)これまで高齢者のセクシュアリティを考慮してこなかった医療専門家にエビデンスを提供する」と述べ、また医療専門家に向けた recommendations では「自分自身の偏見や潜在意識を認識し、誤った臆測を立ててはいけない」と注意喚起している。

本研究は、わが国の従来の調査研究で不十分だった諸点を反省し、超高齢社会における多様で個性豊かな高齢者のセクシュアリティおよびウェルビーイングの望ましい在り方を検討することを目指した。

3. 研究の方法

学際的なアプローチによって高齢者のセクシュアリティと人生の幸福度との関係を

定量的に明らかにし、新しい視点から多様で個性的な高齢者の生態像を正確に分析する実証研究であるため、以下の(□)様々な分野の専門家の参加を得て仮説や質問項目を検討、(□)全国規模の質問票調査を実施、(□)望ましい在り方の提言、といった研究の枠組みにした。

1) 質問項目の開発

・人生の満足度

人生の満足度については、Diener (1985) の Satisfaction With Life Scale (SWLS; 人生満足度尺度)の日本語訳版を使用した。SWLS は、人生の満足度(satisfaction with one's life)を主観的ウェルビーイング (subjective well-being) の認知-判断的側面 (cognitive judgement) として捉え、“自ら選んだ基準に基づく、過去-現在-未来にわたる人生の主観的評価”と定義される (Sumino (1994))。5 項目の質問に対して、評価は 7 件法(「強く同意する」から「強く反対する」)で回答する。多くの言語に訳されているグローバルな尺度である。また、対象の属性(性別、年齢、配偶者の有無、住居形態、収入の獲得方法、仕事従事の有無、家族構成)と EQ-5D についても質問項目として設定した。

・「高齢者のセクシュアリティ」を問う質問項目：

独自に質問項目を開発する

異性との性的関係のみならず人間的なつながりや愛情、友情、融和感、思いやり、包容力など、およそ人間関係における社会的・心理的側面や、その背景にある生活環境などを問う質問項目とする。すでに本研究班の荒木らが 1990 年以來 20 年以上にわたって開発してきた質問項目の基盤があり、それに現代的意義を加えるなどし開発した。

2) 質問票調査方法

対象地域を全国規模とし、65歳以上の概ね健康状態で介護施設に入所していない高齢者を対象に質問票セットを配布した。配布方法として、私たちは東日本の秋田県、岩手県、山形県、栃木県、群馬県、埼玉県、西日本の鳥取県、広島県、山口県、高知県、宮崎県の11県を訪問し、県庁に所属する保健師に対して「健全な高齢者に質問票セットを無作為に（偏らないで）手渡してください」と依頼した。保健師らは地域の健康関連の何かの会合に集まった健全な高齢者に調査の趣旨を説明し、返信用封筒が含まれる質問票セットを配布した。回答者は記入した質問票を返信用封筒に入れて自ら直接投函した（送料後納の封書使用）。この方式により回答者のプライバシーを厳守した。私たちのデータ収集センターで封書を受け取り、データベースを構築した。

4. 研究成果

解析対象者の特徴（配偶者の有無、住居形態、収入の種類）とEQ-5Dの平均を性・年齢層別に明らかにした。男性44%、女性56%であり、年齢分布は65-69歳；45%、70-74歳27%、75歳以上173人28%であった。男性の90%、女性の70%が有配偶者であり、年齢が上がるにつれて割合は低くなっていた。男性の7%、女性の13%が一人暮らしであり、9割近くに配偶者をはじめとした同居人が存在した。収入の種類については、男女とも9割以上が年金収入で暮らしていた。EQ-5Dの平均は、男性で0.90、女性で0.88であった。男女とも年齢が上がるにつれて低くなっていた。

解析対象者の人生満足度の平均とSexualityの回答分布が明らかになった。人生満足度尺度の平均は男性の方が高かった。男性におい

て年齢が上がるにつれて高くなっていた。女性では年齢による変化はみられなかった。

「性についての考え」は、男性の85%が「性はコミュニケーション」ととらえ、90%が「性は楽しい」と考え、74%が「性生活は（どちらかといえば）重要である」と考えていた。女性においては、それぞれ73%、54%、52%と男性よりも低かった。また、男性において、年齢とともにその割合は低くなっていたが、女性においては顕著な傾向はみられなかった。「性生活についての望ましい関係」では、「性交渉を伴う愛情関係」が男性の35%、女性の9%、「性交渉以外の愛撫を伴う愛情関係」が男性の10%、女性の8%、「精神的な愛情やいたわりのみ」が男性の43%、女性の57%、「そのような関係そのものを望まない」が男性の13%、女性の28%と、女性より男性が、また、年齢が低いほど、より直接的な関係を求め、男性よりも女性が、また、高齢になるほど、間接的な関係を求めるか関係そのものを望んでいなかった。

本研究で明らかになった画期的な内容として、性に関して比較的閉鎖的な日本における高齢者のSexualityの実態である。「性についての考え」について、女性よりも男性の方が「性はコミュニケーションである」「性は楽しい」「性生活は（どちらかといえば）重要である」と考えていた。「性生活についての望ましい関係」についても、男性は「性交渉を伴う愛情関係」を望ましいと考えているのに対し、女性は「精神的な愛情やいたわりのみ」を望むか、もしくは「そのような関係そのものを望まない」と考えていた。

「配偶者との関係」について、「配偶者への愛情が（どちらかといえば）ある」と答えた高齢者の割合は、女性よりも男性の方が高かった。特に75歳以上の女性においては、3割が「配偶者への愛情が（どちらかといえば）ない」と答えており、女性は淡泊に夫婦の関

係を捉えていると考えられた。また、「夫婦の寝室が一緒」であるのは、男女合わせて6割程度であり、特に、75歳以上の女性では半数以上が「夫婦の寝室が別」であると答え、海外と比較して低く、日本の独特の特徴と考えられた。「夫婦の会話」については、男性に比較して女性は「少ない」と捉えており、女性がより会話を望んでいた。男性は外の仕事等でコミュニケーションは充実している一方で、女性はそれと比較してコミュニケーションをとる機会が少なく、夫婦間の会話でそれを補いたいのではないかと推察された。

「配偶者との性生活」については、「1年間の性交渉願望」「1年間の性交渉頻度」ともに、女性よりも男性の方が高く、それは年齢とともに落ちていた。これらのことは、男女の性的欲求の差と加齢による性機能の低下によるものと考えられる。65-74歳については海外の結果と一致しており、75歳以上は身体的な衰えによるものと考えられる。「配偶者との身体的触れ合い」については、海外と比較して「キス」や「抱擁」は少なく、一方で、東洋独特の文化である「肩もみ・指圧・マッサージ」が一番多かった。これらのことは、一概に日本の夫婦間で「身体的触れ合い」が少ないということではないと考えられる。Sexualityの回答の分布をみると、「配偶者への愛情がある」「寝室が一緒である」「配偶者との身体的触れ合いがある」について、とりわけ75歳以上の女性において少なく、他の性・年齢層とは異なる集団である可能性が示唆された。

人生満足度との関係については、性についての考えにおいて、性はコミュニケーションである、性は楽しい、性生活は重要であると考えている高齢者ほど人生満足度が高かった。また、性交渉に限定しない「性的な関係そのものを望まない」高齢者の人生満足度は低かった。つまり、性に前向きであることが人生の満足度を高め、「性は楽しい」などと

言い切れるかどうかで幸せ度が大きく違うことがわかった。今までの異性との良い関係性が現在の人生観に大きく影響していること、性と人生の幸福が密接に関わっていることが定量的に示されたと言える。

夫婦の関係性については、夫婦の会話が長く、配偶者への愛情があり、配偶者との身体的触れ合いがあり、夫婦の寝室が一緒である高齢者は人生満足度が高かった。一方で、夫婦間の性生活については、性交渉願望と性交渉頻度において、人生満足度に差はなかった。夫婦の関係性が良好であることと人生の幸福度が関係していることがわかった。高齢者夫婦の“現在”の関係性は、“現在”の性生活よりも、現在に至るまでの長期間の「性についての考え」がより反映しているのではないかと考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

荒木乳根子・中高年の性、性の健康(性の健康医学財団) 査読無、V01.16、No.4 (通巻30号) 2017、pp.7-10

[学会発表](計 1 件)

Chineko Araki, Hirohisa Imai, Hiroyuki Nakao et al. : Sexual activity in the elderly Japanese , 23rd Congress of the World Association for Sexual Health(WAS) , May 30,2017, Prague, Czech Republic.

[図書](計 0 件)

[産業財産権](計 0 件)

[その他] ホームページ等 : なし

6 . 研究組織

(1)研究代表者

今井 博久 (IMAI, Hirohisa)
東京大学・大学院医学系研究科・特任教授
研究者番号 : 20316631

(2)研究分担者

田宮 菜奈子 (TAMIYA, Nanako)
筑波大学・医学医療系・教授
研究者番号 : 20236748

関 ふ佐子 (SEKI, Fusako)
横浜国立大学・大学院国際社会科学研
究院・教授
研究者番号 : 30344526

中尾 裕之 (NAKAO, Hiroyuki)
宮崎県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号 : 40336293

杉澤 秀博 (SUGISAWA, Hidehiro)
桜美林大学・自然科学系・教授
研究者番号 : 60201571

(3)連携研究者

荒木 乳根子 (ARAKI, Chineko)
日本性科学会・セクシュアリティ研究会・
代表
研究者番号 : 60232047